

春は静かに

市川茂子

家内に射し入る初日午前九時ただ沈黙の寒気ただよう

西空の薄ら月まろはも転びゆく正月二日の朝日出できて

滅劫げんこうのきざしのごとくウイルスにむしばまれゆく思いにからる

外山滋比古先生を偲ぶ三首

颯爽と教室に入る外山先生 開始の時間たがうことなく

ご指導を待ち居るわれら先生は席に着くなり稿を手取る

親しみて先生囲んで読み合いしエッセイ教室のいまに懐かし

ほつほつと咲きつぐ冬のばらにして夕影の中はつかに揺れる

命絶つ苦渋のあかしに残されし歌の一首に思い重ねる

「非正規 歌人が残したもの」として紹介された歌集、萩原慎一郎『滑走路』に寄せて

デパートの催事場にて懐かしくみちのく料理の今を味わう

蠟梅の匂いかすかな路地の奥 春は静かに近づきくるも